



海外遠征の道のり

海外遠征記録抜粋…………… 各遠征隊記録集から

- 1967 ネパール王国ワンダリング
- 1971 アンナプルナⅡ峰遠征隊
- 1978 ジュティ・バフラ二峰遠征隊
- 1978 ニルギリ南峰遠征隊
- 1980 ガネッシュ・ヒマールⅢ峰（現Ⅱ峰）遠征隊
- 1982 ガネッシュ・ヒマールⅢ峰（現Ⅱ峰）・Ⅳ峰遠征隊
- 1982 アンナプルナⅡ峰南稜登山隊
- 1994 ギャジカン峰遠征隊
- 1996 ラトナチュリ峰遠征隊
- 2000 ガネッシュ・ヒマールⅡ峰遠征隊

隊員派遣遠征

- 1968 サンタ・クルス・ノルテ峰（初登頂）西郡光昭

海外遠征の道のり

海外登山に対する考え方

アンナプルナⅡ峰遠征報告書の冒頭で、山田和彦が海外登山に対する考え方を述べている。基本的には、この考え方がSACの考え方であると思うので、ここに掲載する。

信州大学山岳会・学士山岳会として、海外遠征（登山）に対する統一した規則などはない。未知へのあこがれ、より高いもの、より美しいもの、より困難なものへの欲求というような、ごく素朴な態度が最も重要であり、基本的なものであろう。

しかしながら、大学山岳会の遠征として、海外登山は単なる各人の登山行為のみで終わらずのものであってよいわけではない。各隊員がそれまでに得た専門的な知識と創造力と、そして旺盛な行動力を生かして、各分野でのフィールドワーク（リサーチ）を行い、何ものかを掴んでくることが重要と考えられる。

とはいえ、1回の限られた遠征では、どれほどの成果が期待できようか。永続性のある遠征計画が望まれる次第である。そのためには、信州大学全体のスケールで計画し、行動する必要がある、その中で山岳会のしめる役割を考えなくてはいけないと考えられる。過酷な環境のもとでも、逞しく行動できるようにトレーニングされた山岳会員こそ、そのような計画の中核になるものと自負してよいだろう。

登山に関して言えば、その基本的な態度は、国内での登山へのそれと変わるところはない。単にピークに立てばよいというのではなく、同志がそれぞれの責務を分かち合いながら、共同で求めた目的を達成しようとする行為、その過程を重要視したい。

また、風俗習慣、気候や食物など、生活環境のこととなるところでの長期間にわたる生活と高所の肉体および精神におよぼす影響はきわめて大きく、登山に伴う危険性は非常に高い。ヒマラヤの7,000mを越える登山は、つねにアドベンチャー的な要素を含み、いままでのヒマラヤでの輝かしい成果も、多かれ少なかれ、危険を冒して得たものである。これらを克服するためにも、十分な研究と緻密な計画、肉体と精神の鍛錬、技術の修得に努めなくてはならない。

また、海外遠征で現地のトラブルについてよく聞かれるが、我々のものの考え方や山に対する姿勢では大きなトラブルが起こるはずがない。それにつけても、渉外をスムーズに行うのは最も重要であり、言葉、特に現地語に強くなる必要がある。

（アンナプルナⅡ峰報告書より）

松尾武久・小川 勝

信州大学には、1951年秋、ランタン・ヒマール遠征に参加された理学部の山田哲雄先生や戦前から朝鮮・ポリネシアで、フィールドワーカーとして活躍しておられた医学部の鈴木誠先生などの先駆者がいるが、山岳会として組織的な海外遠征に対する動きは、全くなかったといえる。しかし、先輩の方々の胸の中には、未知の魅力に対する憧れが、脈々と波を打っていたのであり、それが合宿テントの中や、キャンプファイヤーを囲んで語り合うことをつうじて、後輩へ後輩へと引き継がれていったのであった。

昭和 35 (1960) 年に信州大学山岳会 (SAC) という全学的な組織が結成され、松本山岳部 (医学部・文理学部)、長野山岳部 (教育学部・工学部)、上田山岳部 (繊維学部)、伊那山岳部 (農学部) の上部団体として、ようやく活動を開始したのであった。しかし、SAC も単なる名目的な組織であり、年 2 回の会議において、各山岳部の横の連絡を取るといった現状が、4 年間も続いたのであった。

ただ、海外遠征に対する夢は、マナスル以来、各大学の海外遠征の報告により、刺激されて少しずつ部員の間で実現の方向へ歩みだしていたのである。語り合うだけでは駄目ということで、具体的な勉強会をやるとういうことで、1964 年には「カラコルム・ヒンドゥ・クシュ遠征史」を小川勝がまとめ、部会で研究発表をおこなった。

昭和 39 (1964) 年春の長野県山岳連盟のギャチュンカン遠征とその成功は、我々を刺激せずにはおかなかったのである。

昭和 39 年夏の剣岳遭難事故が発生し、SAC はもっと実質的な方向へ動くべきだとの考え方が各山岳部の主流となり、遭難対策、新人指導の必要上から急速に統合の方向へ進み、乗鞍における第一回山岳ゼミナール、サマーテントの共同運営、合同新人合宿、スキー映画会の開催、SAC 委員会の強化など、今までとは異なって飛躍的な活動を開始したのであった。

昭和 40 (1965) 年 2 月には、長野県山岳連盟の幹部より個人的に、東アフリカ遠征のメンバーとして信州大学からも参加しないかとの話があり、隊員候補の選考なども行われたが、結局実現には至らなかった。しかし、SAC の中に、海外登山研究会を作ろうとの機運が強くなり、同年 3 月に SAC 委員会の下部組織として、海外登山研究会が発足することになった。

研究会は、ヒマラヤ、アンデス、ニュージーランド、グリーンランド等、広く研究しようということではまったが、ネパールの国内事情 (1965 年登山禁止令) から、アンデスへの遠征計画に具体的に着手した。しかし、この計画はまだまだ実現には程遠く、理想と現実とのギャップを痛切に感じたのであった。

昭和 41 (1966) 年 4 月には、長野県山岳協会が発足し、SAC も加盟し、協会の 1967 年ペルー・アンデス遠征隊に、信州大学から西郡光昭を代表として推挙することにし、研究会のメンバーで初めて海外の経験をつむことになった。このことは、メンバーを刺激し、いつまでも長野県山岳協会に頼っているのではなく、信州大学独自の遠征隊を出そうという機運が強くなり、目標を改めてネパール・ヒマラヤに決めて準備会を発足させた。その目的を① 1967 年ポストモンスーンを期してネパールへ遠征隊を出す。② 登山解禁に備えて、OB を交え、偵察隊を出すべく候補地を絞る。という 2 点を決めたのである。地域としては、ランタン・ヒマール、アウトライヤー、チューレン・ヒマール、カンジロバ・ヒマールなどが挙げられ、資料の収集に移った。

同じ時期に、長野山岳部の OB 会である「信稜会」にも、昭和 42 年 (1967 年) 秋にチューレン・ヒマールへの計画が具体化しつつあって、同じ信州大学から、同じ時期に、同じところへ出る計画があるなら、ジョイントしようということになり、実行委員長に学長、副委員長に各学部長になってもらい、全学的組織の遠征隊の結成に努力したが、これもまた失敗に終わってしまった。

しかし、挫折することを知らない部員の間には、なんととしてでもネパールに踏査隊を派遣しようとする強い信念があり、1967 年 5 月の長野県山岳協会のペルー・アンデス遠征隊の出発に遅れること 3 ヶ月にして、「ネパール王国ワンダリング」という信州大学学士山岳会・信州大学山岳会独自の海外遠征を出すに至った。

以降、大学創立の節目の年には、遠征隊を企画し、海外の夢を次々と後輩に託して、未知なる憧れを結

実すべく活動を続けているのである。

海外遠征記録抜粋…………… 各遠征隊記録集から

1967年ネパール王国ワンダリング

昭和42(1967)年8月5日、信州大学としては初めての遠征隊が、希望に胸を膨らませて横浜港を出発した。その計画書の趣旨には、「信州大学山岳会は、中部山岳地帯をホーム・グラウンドとした、恵まれた環境にはぐくまれ、登山界のなかでも特異な歩みをしてまいりました。また先輩の輝かしい伝統を受け継ぎ、地道ながら着実な登山活動を続けてきておりますが、さらに広い視野に立って登山活動を考えるべく、数年来、海外遠征の計画を研究してまいりました。ここに準備も整い、信大山岳会の大いなる目標にむかって発展する一段階として、また信州大学教養部統合を機に、学術調査を含めた全ネパール縦断踏査の遠征を計画いたしました。(中略) 私達のこうした大きな目標をもつこの遠征は単にそのものみに終わることなく、日本・ネパール国間の友好・親善の資にも、また信州大学の海外発展への基礎作りの一助ともなるものと確信いたします」と初めての遠征に掛ける意気込みが感じられる。

遠征の期間

1967年8月～1968年2月

参加メンバー

- 隊長 清水悟郎(教育学部教授)
- 隊員 小川 勝(文理学部学生)
- 佐藤邦彦(工学部OB)
- 望月映洲(教育学部学生)
- 米倉幸夫(農学部学生)

偵察の目的は

- ①グルジャ・ヒマール(サウワラ;7193m) 偵察
- ②ニルギリ中央峰(7223m)、南峰(6837m) 偵察
- ③パウダ峰(6692m) 偵察
- ④ガネッシュ・ヒマール山群の南面(アंक・コーラ上流) 偵察
- ⑤ネパールの広域ワンダリングを通じての風俗・習慣等の情報収集

という5項目があげられた。

行動詳細は詳細報告書を参照頂きたいが、結論的には多大な成果を得て、成功裡に全員の帰国をみたのである。その中でも、日本人として最初と思われるミスティー・コーラ内院の踏査(1950年フランス隊と同じルート)、ガネッシュ・ヒマール南面(アंक・コーラ)の偵察を果たし、また、遠征隊荷の通

関・運送等これ以降の遠征に関する必要事項の試行錯誤を繰り返し、体験してきたことは、何ものにも代えがたく、貴重なことであったと考えられる。

この結果、昭和 43 (1968) 年には、目標の山をガネッシュ・ヒマールのパビール峰 (7,102m) に定め、本格的な遠征隊結成の計画が具体化した。未踏峰であり、我々の実力からしてみても、丁度良いのではないだろうかとの判断により、着々と準備を進めたのであった。

しかし、ネパールの登山禁止令は意外と厳しく、我々の予定した昭和 45 (1970) 年までに登山禁止が解除される見込みが全く無いため、パビール峰は諦めて、目標の山を変更せざるを得なかった。

その次に目標にあがった山は、やはりネパール王国ワンダリングのときに偵察してきたニルギリ山群のうちの、中央峰 (7,223m) であった。ルートとしては、ミリスティー・コーラの左俣を詰め、頂上に至るルートが検討され、実行委員会でも了承された。

隊の編成は、隊長以下 5 名であり、昭和 44 (1969) 年 5 月には隊員候補者の強化合宿も実施され、実行委員会ニュースも発行し、OB と現役一体となつての強力なバックアップ体制がしかれて、本格的な遠征隊の結成に進んでいった。

しかし、ニルギリ中央峰は、この年 3 月に発表された、ネパール政府の登山規則に関する新規則の中の登山許可されている 38 座のなかに含まれておらず、実行委員会のメンバーの胸の内には、一抹の不安が絶えず残っていた。ちょうど、同年の 4 月、OB の百瀬斐敏、吉沢健のネパール予備調査隊が出発し、ニルギリ峰の登山許可の可能性を打診することになった。期待と不安でまんじりともしない実行委員会へ両氏から連絡が入り、許可の見込みが非常に少なく、時を同じくして、ティリツォ・ピークに計画を持つ泊山岳会にも、不許可の報が入っており、再三にわたる目標の山の変更については、実行委員会のなかでも賛否両論があい対立して、遠征計画に重大なピンチが訪れようとしていた。

そこで実行委員の誰かを、ネパールに派遣し、登山局と交渉させようとした矢先、OB の山田和彦がエベレスト・スキー探検隊の医師として参加することになり、全てを山田 OB に託して、その連絡をまった。

山田 OB は、実行委員会の決定に従い、アンナプルナ II 峰に仮申請し、同年 10 月 7 日、ネパール政府から正式の登山許可が届いたのであった。これにより、1971 年のプレ・モンスーン期を目標に総ての行動が開始されたのである。

1971 年、アンナプルナ II 峰遠征隊

信州大学創立 25 周年を記念した信州大学山岳会、学士山岳会が総力をあげての本格的遠征隊であった。後援会の組織も、当時の長野県知事、西沢権一郎氏に就任していただき、全県をあげての組織となった。

遠征の目的

- ① 中部ネパール・アンナプルナ II 峰 (7,937m) の登頂
- ② 高所における運動の人体におよぼす影響の調査研究
- ③ プレモンスーンアンナプルナ周辺の気象データの収集
- ④ ネパール・ヒマラヤ山域の花弁・花木類のわが国への導入についての調査研究
- ⑤ 中部ネパールにおける稲の害虫被害の自然制御状況の調査研究



●最終キャンプからアンナプルナⅡ峰とラムジュン・ヒマール

- ⑥氷河地帯における砂石の生産、流出状況の調査研究
- ⑦ネパール・ヒマラヤ山域における有用林木の成長率の調査研究

遠征の期間

1971年2月～11月

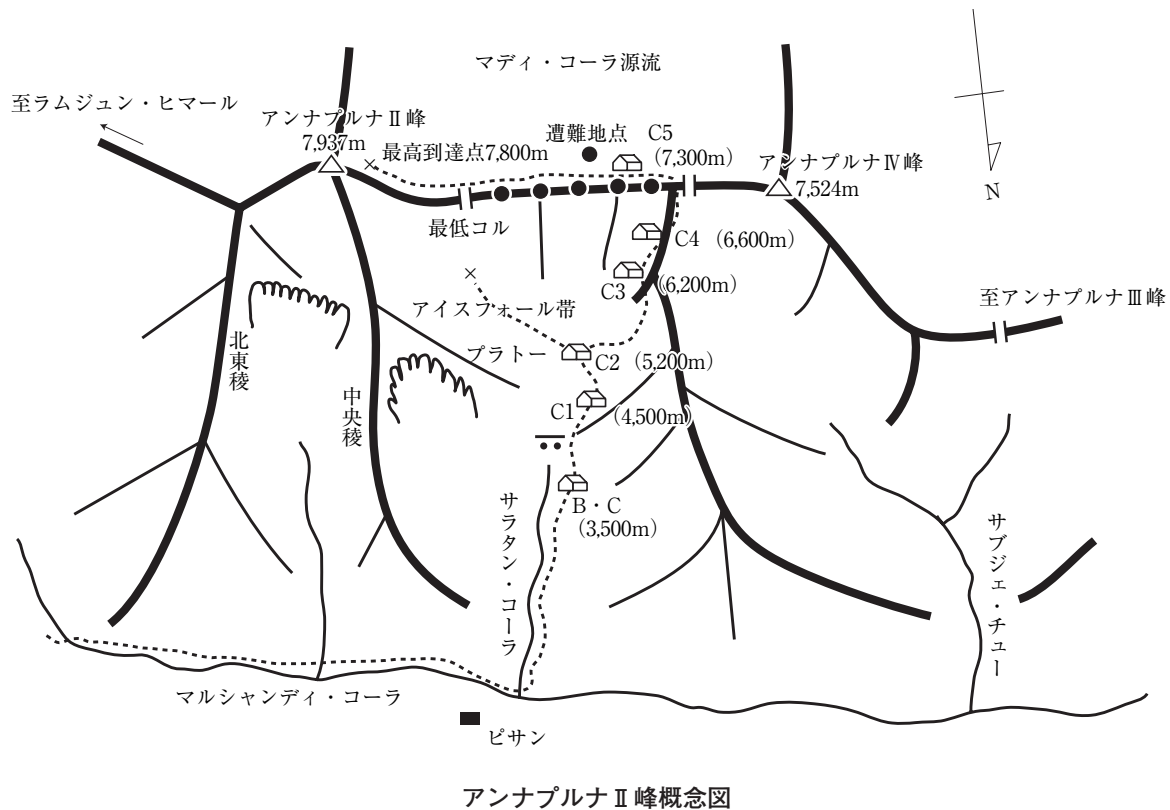
参加メンバー

隊長（渉外・総括）	西郡光昭（医学部OB）
副隊長（梱包・輸送）	片岡 格（工学部OB）
隊員	
（記録・報道）	堀 勝彦（農学部OB）
（装備）	森田稲吉郎（繊維学部OB）
（記録気象）	松尾武久（文理学部OB）
（マネージャー）	宮崎敏孝（農学部OB）
（装備）	岡村知彦（教育学部OB）
（マネージャー）	扇能 清（農学部学生）
（食糧）	山下泰弘（農学部専攻科学生）
（梱包・輸送）	佐藤正敏（人文学部学生）
（食糧）	市野和雄（農学部学生）
リエゾン・オフィサー	ハリ・ダス・ライ
シェルパ サーター	ギルミ・ドルジェ 他14名

行動概略

（詳細は、「1971年アンナプルナⅡ峰遠征報告、昭和47年12月1日発行」を参照のこと）

3月26日 BC建設、ピサン村サラタン・コーラ、3,500m地点
 30日 C1建設（4,500m）



- 4月 3日 C2 建設 (5,200m)
- 9日 仮C3 建設、その後ブロック崩壊によりルート変更となる
- その後悪天候のため、全員 BC にて待機
- 25日 C2 再建設
- 28日 C3 建設 (6,200m)
- 5月 1日 C4 建設 (6,600m)
- 3日 C5 建設 (7,300m)
- 4日 頂上アタック、7,800m まで到達、帰路、佐藤正敏君遭難

佐藤正敏君の遭難という結果に終わり、信州大学山岳会、学士山岳会が総力をあげた遠征は失敗に終わった。しかし、このビッグプロジェクトを立ち上げ、実行まで持っていった経験は、これからの遠征隊に脈々と受け継がれていくことになる。その点から見ると、一つのエポックメイキングであった。

1978年春 ジュティ・バフラニ峰遠征隊 (初登頂)

昭和 52 (1977) 年ネパール政府の登山規則が変わり、その文面から我々は「総ての山に対して申請が可能」と解釈してガネッシュIV峰の登山申請をしたが、日本山岳会の推薦が得られず、再度ニルギリ南峰へ変更して申請した。しかし、ネパール政府からの返事は不許可であった。

山田和彦達の判断では、1978年には確実に許可が得られる山に隊を出し、その過程でガネッシュの許

可が得られれば、そちらへ変更して行こうということで、少人数で登れる 7,000m 前後の未踏峰が条件であった。信大としては、東部、中部ネパールは誰かしら歩いており、西部ネパールだけが未踏の地域として残されていた。これらのことより西部ネパールで最も高い処女峰ジュティ・バフラニが目標の山となった。

遠征の目的

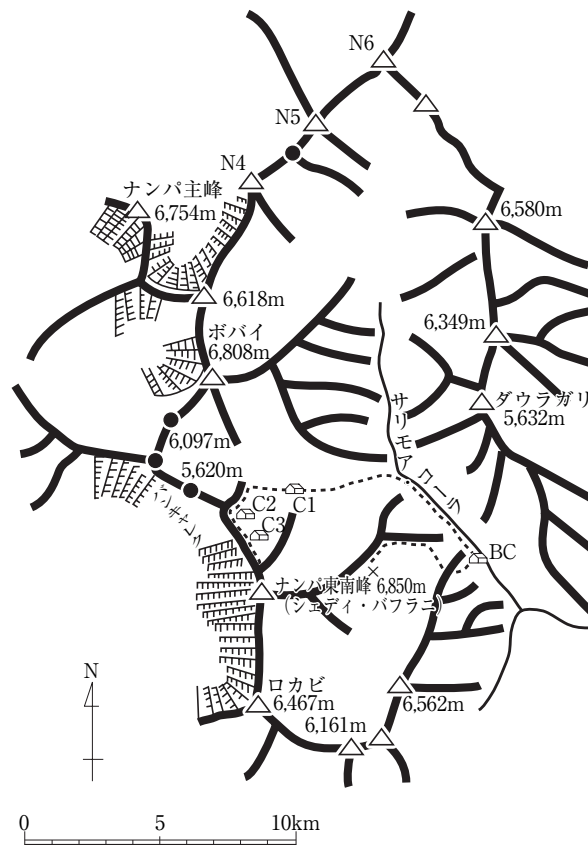
西部ネパール、ジュティ・バフラニ峰“ナンパ東南峰”（6,850m）の初登頂

遠征の期間

1978年2月～6月

参加メンバー

- | | |
|------------|--------------|
| 隊長（渉外・医療） | 山田和彦（医学部OB） |
| 隊員 | |
| （会計） | 井関芳郎（農学部OB） |
| （食糧） | 三井和夫（人文学部OB） |
| （装備、梱包、輸送） | 吉田秀樹（人文学部学生） |
| （医療） | 師田信人（医学部学生） |



ナンパ東南峰（ジュティ・バフラニ）周辺概念図

リエゾン・オフィサー ウベンドラ・アディカリー シェルパ サーダー アン・テンバ 他4名

行動概要

(詳細は、「NEPAL HIMALAYA EXPEDITION 1978、昭和59年9月10日発行」を参照のこと)

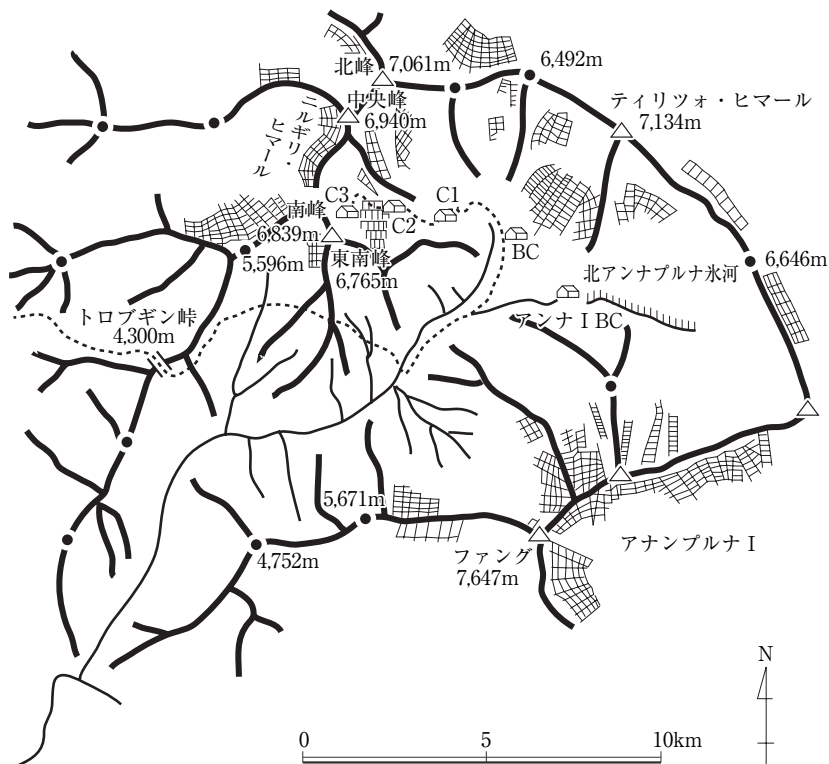
- 4月7日 BC予定地(3,950m)到着
- 8日 登山開始
- 12日 C1建設
- 14日 C2建設
- 20日 C3建設
- 27日 頂上アタック、三井、吉田、師田、14:20 初登頂達成

以後、三井、吉田、師田の三人はネパールに滞在し、ポストモンスーンのニルギリ南峰の遠征隊にも参加することになった。

1978年秋 ニルギリ南峰遠征隊(初登頂)

昭和53(1978)年1月、登山関係の所管は、外務省から観光省に移管され、新たに登山許可峰を発表した。この中には、ネパールとのジョイントで許可される峰としてパビール峰等、外国隊に許可する山としてニルギリ南峰をも含んでいた。

同年3月、ジュティ・バフラニ隊がカトマンズに集結したとき、観光省から同時期のニルギリ南峰の許



ニルギリ・ヒマール周辺概念図

可が下りていることが判明した。これは77年2月の申請が生きていたためであった。プレモンスーンからポストモンスーンの変更が可能ということになり、金銭面、隊員など困難はあるが実行することになった。

三井隊長は、報告書のなかで「この遠征隊の誕生した経緯は、長山協、日山協、外務省、駐ネパール日本大使館の暖かい心情と積極的な支援を受けた賜物であり、また観光省の開放的で好意ある姿勢は、いつまでも心に残る感謝の気持で一杯である」と述べている。

7月1日、ジュティ・バフラニ隊を含む4隊に対し観光省は、3年間の入国禁止と5年間の登山禁止を通達したが、3日に罰則は隊長の5年間の登山活動の禁止に留まる旨の発表があった。山田隊長名でなされた申請書を、隊長名を三井和夫に変更して受理され、登山が可能となった。

1967年の本格的なネパール踏査以来、信大念願のニルギリ南峰の登山が行われることになった。その間、71年の偵察、73年の日本山岳会信濃支部のアンナプルナI峰の医師・隊員として参加したOBの新谷から、ルートはニルギリ中央峰と南峰の間のアイスフォール帯が有力であるとの情報も得ていた。

遠征の目的

中部ネパール、ニルギリ南峰（6,839m）の初登頂

遠征の期間

1978年8月～10月

参加メンバー

隊長（渉外）三井和夫（人文学部OB）

隊員

（会計）藤松太一（教育学部OB）

（装備）吉田秀樹（人文学部学生）

（医療）師田信人（医学部学生）

（食糧）田中誠司（農学部学生）

（装備）加藤喜章（農学部学生）

リエゾン・オフィサー

カマル・ドゥンガーナ

シェルパ サーター

アン・テンバ 他4名

行動概要

（詳細は、「NEPAL HIMALAYA EXPEDITION 1978、昭和59年9月10日発行」を参照のこと）

9月17日 BC建設（ミリスティー・コーラ）

24日 C1建設

10月1日 C2建設

8日 C3建設

10日 4：20頂上アタック、14：15全員登頂を果たす

1980年 ガネッシュ・ヒマールⅢ峰（現Ⅱ峰）遠征隊

昭和42（1967）年のガネッシュ・ヒマール南面アंक・コーラ偵察以来、我々は永年に亘り、ガネッシュ・ヒマールⅣ峰（パビール）を目指していたが、1978年労山とネパール警察の合同隊によって初登頂されたので、1973年東面チリメ・コーラ内院の偵察を基に、目標をⅡ峰（ラブサンカルポ）に変更して計画を進めていた。しかしながら、同峰は1979年岡山大とネパールの合同隊により初登頂され、未踏峰にこだわった我々は、峻険な難峰といわれているⅢ峰に目標を転じ、ついに許可を取得した。当時、ガネッシュⅢ峰は未踏峰であり、ネパール政府の登山規則に基づき、シェルパをネパール隊員として、隊を編成した。

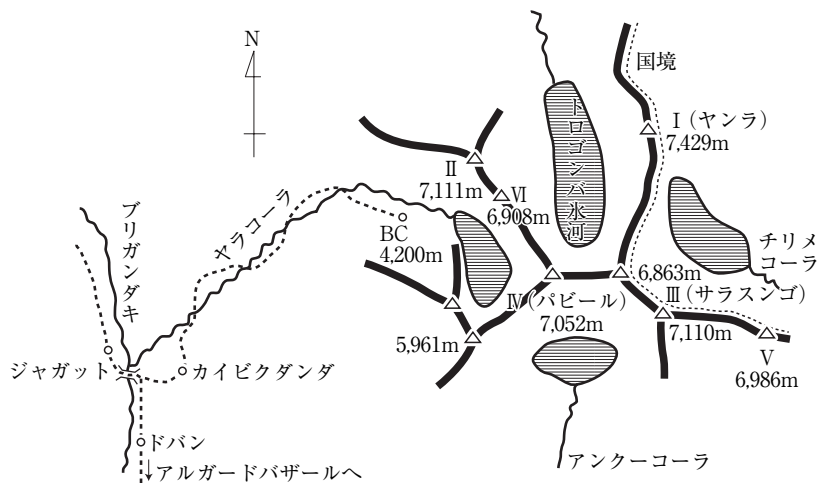
この遠征には、元アンナプルナ遠征隊の故片岡格さんの尽力が大きくあり、実現したものである。同氏は、1979年11月24日の当遠征隊の富士山強化合宿のときに、つばくろ沢に滑落して、死去された。

遠征の目的

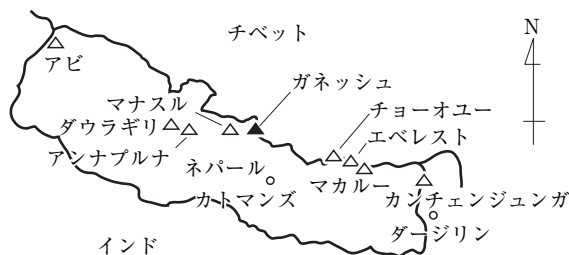
ガネッシュ・ヒマールⅢ峰（7,132m）の初登頂

遠征の期間

1980年2月～5月



ガネッシュ・ヒマールⅢ概念図



ネパール・ヒマラヤ概念図

参加メンバー

隊長

新井陽一郎（工学部 OB）

副隊長

渡部光則（農学部 OB）

隊員

中田 茂（人文学部 OB）

藤元治朗（医学部 OB）

福島 渉（農学部 OB）

二俣勇司（経済学部学生）

山本 章（教育学部学生）

下田 章（農学部学生）

リエゾン・オフィサー G. R. スペジ

シェルパ サーダー アン・テンバ 他2名

行動概要

（詳細は、別冊「遙かなりガネッシュ・ヒマールⅡ峰、平成14年5月31日発行」を参照のこと）

3月28日 BC建設（ヤラ・コーラ 4,050m）

4月4日 C1建設（4,700m）

11日 C2建設（5,200m）

18日 C3建設（5,700m）

28日 C4建設（6,200m）

5月5日 C5建設（6,600m）

7日 スノーピーク（6,800m）、福島、山本、二俣、最高到達地点

1982年 ガネッシュ・ヒマールⅢ峰（現Ⅱ峰）・Ⅳ峰遠征隊

2年前、同峰を退却したが、その教訓を胸に再度のチャレンジを試みた。しかし、隊員の殆どが事故あるいは体調を崩し、自分達の力を発揮する前に、退却せざるを得なかった。

ポスト・モンスーンは、キャラバン時に雨が多く、体調管理が難しいことが良く分かった山行であった。ヤラ・コーラに入って、蛭地獄におちいり、ポータートラブルが発生し、余分な体力を使って、BCまでの荷揚げを行ったのも敗退の遠因であった。6,200mが最高到達地点であった。

遠征の目的

ガネッシュ・ヒマールⅢ峰（7,132m）・Ⅳ峰の登頂

遠征の期間

1982年8月～10月

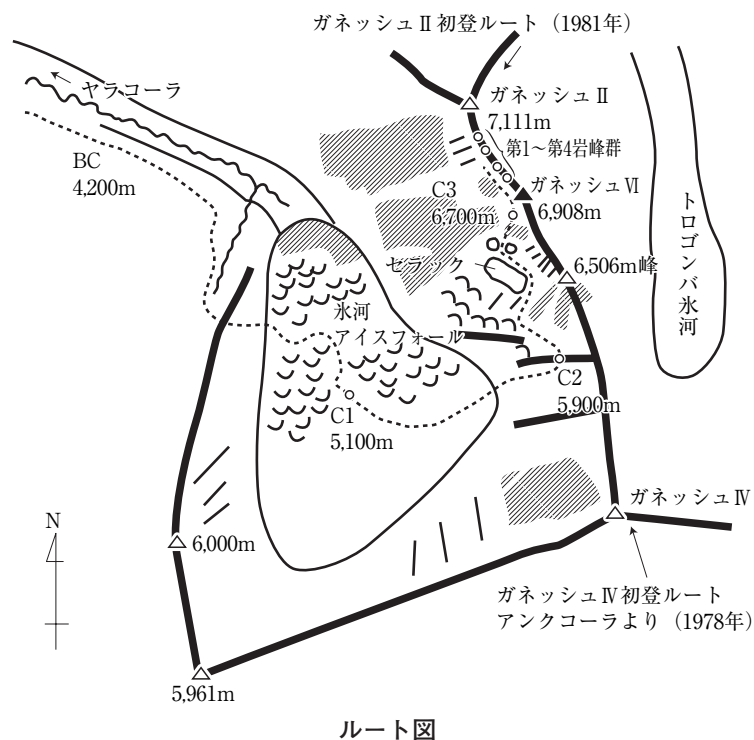
参加メンバー

- 隊長 中田 茂 (人文学部 OB)
- 副隊長 小根田一郎 (農学部 OB)
- 隊員 加藤喜章 (農学研究科院生)
- 関 圭三 (人文学部学生)
- 田辺 治 (農学部学生)
- 保科 実 (理学部学生)
- 細川和幸 (農学部学生)
- リエゾン・オフィサー ラビン・ラナ
- シェルパ サーダー アン・テンバ 他2名

行動概要

(詳細は、別冊「遥かなりガネッシュ・ヒマールII峰、平成14年5月31日発行」を参照のこと)

- 9月17日 BC建設 (ヤラ・コーラ)
- 26日 C1建設
- 10月12日 C2建設
- 22日 IV峰に続く尾根上の小ピーク (6,200m) 加藤、細川、小根田、田辺、中田、保科、最高到達地点



ルート図は、第三次遠征隊のものである。今次、遠征隊のルートは、表示していない。

1982年 アンナプルナⅡ峰南稜登山隊

1971年春、信州大学山岳会と学士山岳会は、初めてヒマラヤ登山隊を、アンナプルナⅡ峰へ送った。南面はマディ・コーラのゴルジュ帯を越えるのが不可能とされており、北面から西稜へルートを取ったが、5月4日、C5より登頂に向かった佐藤隊員とギルミ・ドルジェは7,800mで力尽き、その帰途で佐藤隊員の転落死亡という悲しい結果となった。

この遠征は、我々にヒマラヤの厳しさを教えてくれた。しかし、我々はくじけることなく、その後、いく度かの遠征を経験し、力を蓄えてきた。

我々はアンナプルナⅡ峰の南面からの登山について、会員の偵察や航空写真の分析から、南稜のルートの可能性は十分あると考えていた。1981年、大阪登攀クラブが、このルートからの登頂を目指したが、途中で敗退している。同クラブの桑原氏から、詳細な情報の提供を受け、このルートからのアタックを実現すべく、82年4月にネパール政府に登山申請をした。

遠征の目的

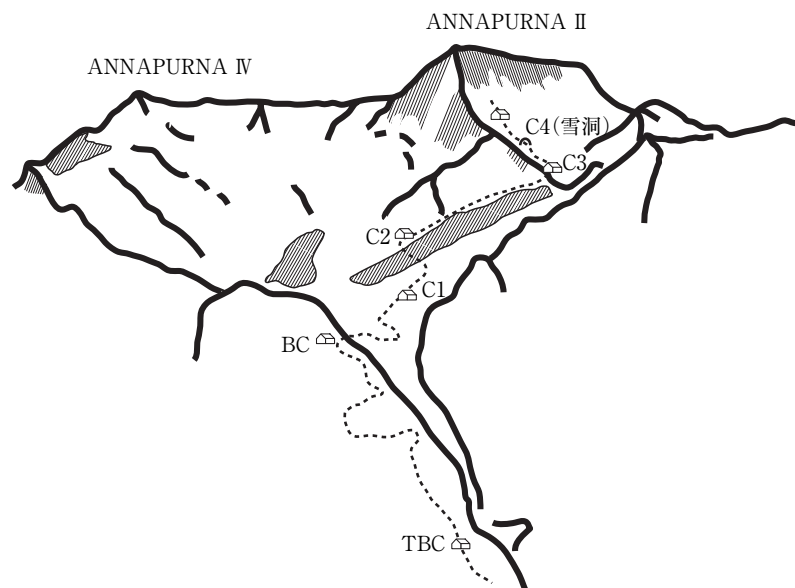
アンナプルナⅡ峰（7937m）南稜からの登頂

遠征の期間

1982年8月～10月

参加メンバー

隊長 山田和彦



(医学部 OB)

隊員 三井和夫 (人文学部 OB)

吉田秀樹 (人文学部 OB)

師田信人 (医学部 OB)

横山 篤 (東京水産大学山岳部 OB)

リエゾン・オフィサー D. P. リマル

シェルパ なし

行動概要

(詳細は、別紙の報告書「アンナプルナⅡ峰南稜」を参照のこと)

9月3日 仮BC建設 (マディ・コーラ)

14日 BC建設

15日 C1建設 (4,800m)

22日 C2建設

26日 C3建設 (5,900m)

10月1日 C4建設 (6,500m 雪洞)

3日 C5建設

5日 吉田、師田は南壁基部に取り付くも高度障害のため体調すぐれず、南壁にフィックスロープを固定し、下降ルートを確認する余力がないと判断。この日で登頂を断念することになった (最高到達点 7,300m)。

今回の登山では、当初 C3 までセミポーター法で行き、C3 から三井、吉田、師田によるアルパインスタイルでの登頂を考えていたが、最後の壁を安全に降るためには、ロープを固定する必要があるとの結論に達し、そのために C5 までセミポーター法で登攀することとなり、かなりの量の装備を C5 まで上げる必要が生じた。また BC から ABC まで、ABC から 2 つの氷河を渡って南陵に到達するまでの距離が予想以上であり、体力と日数を消耗した。このような要因が重なり、最終的に敗退することとなった。

1994 年 ギャジカン峰遠征隊 (初登頂)

信州大学創立 45 周年を記念して、1994 年秋に、もう一度アンナプルナⅡ峰北面の未踏ルートへの挑戦が計画されたが、1993 年にバインターブラック登山隊の OB 吉田が帰途にアンナプルナ北面を偵察した結果、中央稜は落石と雪崩が多く、あまりに危険であることが確認されて、同ルートは諦めることになった。

そしてカトマンズ滞在中の OB 田辺を通じ、予てより第二目標であったヒムルン・ヒマールのギャジカン峰とラトナチュリ峰に目標を変えて登山計画書を出し直したのであった。未踏峰への登山は、ネパール隊との合同登山隊に限って許可されるという規則に従って、ネパール警察の登山探検財団と提携することになった。これには、山田哲雄先生の尽力が大きな役割を果たしており、信州大学山岳会としても初の日本・ネパール合同登山隊であった。そして、一次隊、二次隊、三次隊の隊員全員の登頂を果たすことができたのである。

遠征の目的

ギャジカン峰 (7,038m) の初登頂

遠征の期間

1994年8月～11月

参加メンバー (日本側11名、ネパール側7名)

総隊長 山田哲雄 (理学部長 教授)

総隊長代理 山下泰弘 (農学部OB)

隊長 藤松太一 (教育学部OB)

グプタ・バハドゥール・ラナ

副隊長 田辺 治 (農学部OB)

シェル・バハドゥール・カルキ

隊員 三野和哉 (農学部OB) ギタ・バハドゥール・ジョシイ

中村貴士 (農学部OB) ラムカジ・シヴァコティ

中村幸典 (農学部OB) パダム・バハドゥール・カトゥリ

小久保陽介 (農学部OB)

長谷川聡貞 (農学部OB)

橋口 徹 (教育学部学生)

伊藤勇太郎 (農学部学生)

リエゾン・オフィサー医師 ディネシュ・チャンドゥラ・ポカレル

無線技師 バル・ラムティ・ミルシナ

シェルパ サーダーヌル・シェルパ

高所ポーター 3名

行動概要

(詳細は、別冊の登山報告書「HIMALAYA94 平成8年5月1日発行」を参照のこと)

9月21日 BC建設 (ナル・コーラ)

23日 C1建設 (5,350m)

29日 C2建設

10月1日 C3建設 (6,300m)

7日 第一次隊登頂

10日 第二次隊登頂

14日 第三次隊登頂

19日 帰路につく

30日 カトマンズ着、警察のパレードに参加

1996年 ラトナチュリ峰遠征隊（初登頂）

1994年にギャジカン峰（7,038m）の全員初登頂を成し遂げた我々は、そのとき登り残したラトナチュリ峰（7,035m）に挑戦することになった。同峰は中国とネパールの国境に位置しているため、登山許可をとることが難しい状況であった。しかし、ネパール警察のラナ氏の尽力により、ネパール政府から最終的に合同隊という形で登山許可が取得できたのである。この遠征隊も全員の登頂という快挙をなしとげ、日本とネパールの友好に大いに寄与したのである。

遠征の目的

ラトナチュリ峰（7,035m）の初登頂

遠征の期間

1996年8月～11月

参加メンバー（日本側8名、ネパール側7名）

総隊長 野村昌男（工学部OB）

隊長 渡部光則（農学部OB）

グプタ・バハドゥール・ラナ

登攀隊長 田辺 治（農学部OB）

ギタ・バハドゥール・ジョシイ

隊員 金子鉄男（工学部OB）

ラム・カジ・シヴァコティ

澤田克彦（農学部OB）

サンタ・バハドゥール・アレ

内田健一（農学部OB）

花谷泰広（教育学部学生）

小林茂幹（人文学部学生）

医師 ヴィシュワナス・シェレスタ

リエゾン・オフィサー ジャヤ・ビシュヌ・ネパリ

無線技師 バブ・ラム・パウダル

シェルパ サーダー スル・シェルパ

高所ポーター 4名

行動概要

（詳細は、別冊の登山報告書「ラトナチュリ初登頂報告書 1999年3月31日発行」を参照のこと）

9月20日 BC建設 プー・コーラ（5,200m）

23日 前進BC建設（5,500m）

10月1日 C1建設（6,000m）

8日 C2建設（6,550m）

14日 第一次隊登頂

- 16日 第二次隊登頂
- 18日 第三次隊登頂
- 22日 帰路につく
- 11月3日 カトマンズ着、警察のパレードに参加

2000年 ガネッシュ・ヒマールⅡ峰遠征隊

1971年のアンナプルナⅡ峰の遠征から30年、その間、ヒマラヤからカラコルム、アンデス、ヨーロッパアルプス、ロッキーと世界各地でその力を磨いてきた集大成として、信州大学創立50周年を記念して、ガネッシュ・ヒマールⅡ峰を三度挑戦することになった。当時のOBの中で最強のメンバーを揃えて、挑戦したが、BC建設後連日の降雪があり、毎日新しいラッセルを余儀なくされ、この連日のラッセルが“ボディーブロー”的に“微消耗の蓄積”となり、最終段階の余裕を削減したといえる。

それでも技術的に困難な信大ルートを開拓し、Ⅵ峰(6,908m)からⅡ峰に続く、ヒマラヤ巒の側壁を乗り越え、乗り越えトラバースして、第3岩峰まで到達した。

遠征の目的

ガネッシュ・ヒマールⅡ峰(7,111m)の初登頂

遠征の期間

2000年3月～6月

参加メンバー

- 隊長 吉田秀樹(人文学部OB)
- 登攀隊長 田辺 治(農学部OB)
- 隊員 内田健一(農学部院生)
- 松下修也(繊維学部OB)
- 原田亮介(農学部学生)
- 花谷泰広(教育学部学生)
- リエゾン・オフィサー ビクラム・ネパリ
- シェルパ サーダー ダヤン・バハドゥール・ライ

行動概要

(詳細は、別冊「遥かなりガネッシュ・ヒマールⅡ峰、平成14年5月31日発行」を参照のこと)

- 4月9日 BC建設(4200m)
- 18日 C1建設(5100m)
- 22日 C2建設(5950m)
- 5月12日 C3建設(6700m)
- 23日 Ⅵ峰登頂

24日 BC集結
6月5日 カトマンズ着

ホ ッ ト ひ と 息

ヒマラヤに対する思いから仮想遠征計画を作成したことがある。遠征の許可取得、外貨申請、船積み、通関、内陸のトランスポート、諸費用等勉強会の資料が出てきたので番外として表紙のみここに掲載する。暫しの談笑の話の種にしてください。

信州大学雑人会

1970年 ナンダモンダヒマール登山隊行動計画表

3月	日	奥又汽船“インラン号”にて神戸発
3月	日	香港、シンガポール経由カルカッタ着
3月	日	カルカッタにて貨物の陸揚げ、保税通関シール
3月	日	カルカッタ、カトマンズ（またはパトナ）空路輸送 空港における貨物のシール検査
4月	日	カトマンズでの準備
4月	日	カトマンズ発キャラバン開始
4月	日	ベースキャンプ着
4月	日	ナンダモンダ・ヒマールの主峰 ビッグ・ピンク峰 (8931米)への登山開始
5月	日	登頂成功
6月	日	ベースキャンプ発
6月	日	カトマンズ帰着
7月	日	カルカッタ着
7月	日	米原子力船“シードラゴン号”にてカルカッタ発
7月	日	佐世保か横須賀または横浜着

隊員派遣遠征

ペルー・アンデス コルディエラ・ブランカ サンタ・クルス・ノルテ峰初登頂

西 郡 光 昭

信州大学山岳会（SAC）は、長野県山岳協会の1967年ペルー・アンデス遠征隊への隊員派遣要請を受け、これにOBの西郡光昭を派遣した。SACとしては、将来の海外登山の経験を積む絶好のチャンスと捉え、組織を挙げて応援した。ここに掲載するのは、同氏の「アンデス遠征記」から、サンタ・クルス・ノルテ峰（5,829m）の西壁経由で頂上に至る核心部分記録を抜き出したものである。（編集委員会）

7月8日 BCは高度4,200mの大きい氷河湖の岸の平坦な岩盤の窪みに設けられた。そこから少し登ると、いわゆるサンタ・クルス3山が秀でて美しい影を湖水に映している。南から主峰、仔峰、それに圧倒的な西壁の北峰。しかし、とにかくBCは建った。このBC付近は、早大隊のN.アルパマヨ、クロード・コーガンのN.キタラフへのアプローチの途中にあたる。彼（彼女）らはここから隣の谷へ降り、これを遡行したことになる。残念だがアルパマヨやキタラフはサンタ・クルス3山に遮られてBCからは見えない。

C1からラフ・コーチャの左岸をへつってサンタ・クルス・ノルテ氷河に入ると、N.ワンツァンとは違って氷河の荒れようがひどい。宮下（早大岳友会、在ペルー）、小林（上田山岳会）、西郡の3人は、氷河の弱点をつきながらルートを延ばしてみたが、でかいクレヴァスに阻まれて追い返されてしまった。我々がサンタ・クルス・ノルテの登路に考えていたのは、西面からノルテ氷河をつめて、ノルテの頂上から南西に落ちている稜線に出てこれを頂上まで辿るというものだ。

7月16日 宮下、西郡は南西稜よりの氷河にルートを開くべく出発した。結局、これがうまくいっ

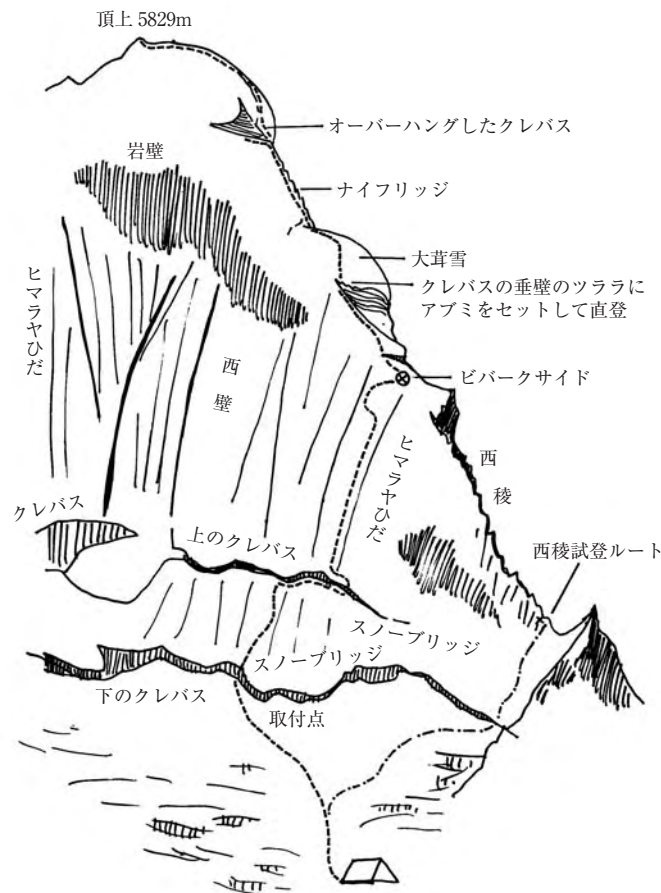
て、何とか氷河を縫うように進み、ノルテの西壁の取り付きまで詰めることはできたのだが、今度は、もくろんでいた南西稜が絶望的なものだった。稜線はカミソリのように切り立っていて、所々にキノコ雪を乗せているのだ。

「おい、オッチャン（宮下のこと）！ 冗談じゃねーな。こんなとこ登れなんて死ねというのと同じだ！」「ホント！そんなこという奴あ、ぶっ飛ばしもんだ！」

じりじり照りつける太陽の下、氷河の中に立つ2人は恨めしそうにノルテの頂上を見上げるばかり、しかし、不思議に悲壮感はない。真正面にはノルテの圧倒的な西壁が、青々と不気味なほどのアンデスひだをつけていて、その壁の下段と中段には、幅の広いクレヴァスが口を開けているのだが、慣れっこになったのだろうか。

すると、突然、宮下が声をかける。「おい、ドクトール（西郡のこと）！ あの壁を登るより仕様ないんじゃない？」宮下は気が狂ったんじゃないかと思ってしまう。どう鼻屑目にみても50度以上はある西壁の氷のルンゼを登ろうというのだ。なるほど雪崩の心配はないようだが高度差は400mはある。第一、あのどデカイ2本のクレヴァスをどうやって越そうというのか。

「スノーブリッジも無さそうだから、クレヴァ



サンタ・クルス・ノルテ西壁登攀ルート図

(作図：YOKOCHI)

スの端に廻りこんで壁をルンゼの下までトラヴァースするしかシャーナイ。とにかく横地さん(副隊長)に相談しよう」

その晩はなかなか寝付かれなかった。宮下の意見を副隊長の横地は慎重に聞いていたが、他にルートが取れないとなれば、結局、西壁に取り付くことになるだろう。そうすると、メンバーの半分以上が調子を崩している現在、自分にも西壁に行けと指示が出るだろう。あんな氷のルンゼを登る自信はオレにはない。あの壁が登れたら、という思いはあるが…。

7月16日 天候の変化に心配の要らないアンデスはいたってのんびりムード。出発は9時半になってしまう。やっぱり、宮下、西郡で西壁の工作に出ることになった。ザイル、スノーバー、ピッ

ケル、アイスバイル、フィックス用クレモナやガチャ類を一杯詰め込んで出発。西壁基部のクレヴァスまでは少し急な雪壁で難なく到着。さあ問題の西壁だ。下段のクレヴァスには幸運なことに脆そうなスノー・ブリッジを見つけて宮下が氷を抱くようにして乗り越していく。アンデスの氷雪に経験のある宮下にトップをまかせると、彼は平然と、しかも早いテンポでザイルを伸ばしていくのだが、自分はどうしてもビビッてしまって、彼の後についていくのがやっとだ。2人とも、ピッケルとアイスバイルをハンドホールドに、アイゼンはタニの12本爪。40m3ピッチで中段のクレヴァスに着いた。初めての氷雪登りの緊張とバテで喉がカラカラだ。この上の見通しも立てられたので今日はここまで。これまでフィックスした3ピッチのザイルに頼ってアプザイレンで降る。

7月20日 西壁にさらに2隊員が補強されて、工作は楽になった。小松（木曾福島山岳会）と小林が先行して支点を残していき、その後を宮下、西郡が昨日のフィックスを伸ばす作戦。先行の2人も始めはてこずっていたが、次第にピッチが上がりだす。とはいってもこちらは、今日の6ピッチのフィックスにはすっかり音をあげてしまった。スタンスのカッティングに腕力は要るが、氷の破片が下のパートナーに当るので危なくてしょうがない。息は切れる、足首は痛い。何のためにこんな苦労を、と幾度も思った。午後3時過ぎ、そこだけ軟雪の深い稜線に這い上がったころには、喉が渇き切り、すっかりバテていた。

ここから頂上へのルートはどれもパツとしたものではないようだ。ガスで上部が隠れたのをきっかけに下りにかかる。とにかく何とか西壁を登り切って稜線に出られたのだから、この上が最悪の状況でも自分としては十分諦めがつくという思いだった。降りの9ピッチのアップザイレンは、腕、腹の痛みこの上なし。

7月23日 予期したとおりの晴天。8時過ぎC2を出発。稜線上でビヴァークを予定しているが、シュラフやホエブスまで持っていくのだから快適にやれそうだ。自分は西壁3度目なので気分的に楽になっていた。快調に高度を稼ぎ、正午には南西稜の以前の到達点に達する。手ごろな吹き溜まりに雪洞を掘るためサポートの2人に残ってもらい、宮下と西郡はできるだけ上部まで工作を進めるべく前進。雪洞予定地から2～3ピッチは、難なくザイルも伸びて順調だったが、その上でかなり大きな氷のオーバーハングにぶち当たってしまった。逃げ道はなく、まともに越すしか方法がない。このハングには氷のクラックが入っていて、少し奥に直径10cmほどのツララが下がっている。

こういう場所にくると、宮下という男は、俄然ファイトを燃やす奴である。「ドクトール！オレにトップをやらしてくんねーかな」彼はハン

グの氷にアイスハーケンを打ってアブミを2回使い、3回目にはツララにセットしたアブミに左足をかけ、右足のツアッケをハングの端に引っ掛けるようにしてひと踏ん張りすれば、体がスーッとハングを乗り越える。すごい奴だ！

この上さらに2ピッチの急な雪壁を登り、かなり広い雪のテラスに出たところで今日の工作は終わり。

7月24日 6時起床。7時、炊事道具や寝具を残し登攀道具だけ持って雪洞を出る。宮下と西郡が先行、林（GDM）と小林（上田山岳会）はサポート。これまで、しょっぱい個所は、アンデスで経験を積んでいる宮下にトップを任せていたが、今日はずべて時間を稼ぐことにする。昨日の到達点までは、フィックスを使えばさすがに速く、昨日の3分の1、約1時間で達することが出来た。広い雪のテラスで一息入れ、登攀を続ける。

テラスから上は急な雪壁が3ピッチほど頂上下の大雪庇に続いている。膝までもぐる雪をしゃにむに漕ぎ進むと、何と、この大雪庇の下には、高さ1mの割れ目が水平に15mほど走っているのではないか。「しめた！」この割れ目を這い進んで南側に出れば弱点があるかもしれない。代わった宮下が這いつくばってザイルを伸ばし、やがて南面の雪壁に消えたが、この割れ目から南壁に移る部分が悪いらしくて、時間がかかる。合図があり、後に続くと、なるほど出口が悪い。おまけに南壁がまともに切れ落ちていて、落差が1,000mはあるだろうか。金的から肛門へ思わず戦慄が走る。西郡がトップに立ったころから、南壁はブカブカの雪になり、腰から胸までのラッセル。足場を固めてずり上がるが、下の場所までズリ戻ってしまう。このあたりは恐らく一年中陽があたらないせいでだろう。

嫌なラッセルを宮下と2、3度交代すると、やがて上が急に開け、そこにはデパート屋上ほどの雪の台地だった。その台地の向こうに丁度ダルマの形をした、ちょっと突き出たピークがあった。

それが頂上だったが、2人が一緒に立つには狭すぎるように見えた。

「ドクトール、先に登りなよ!」、「いや、オッチャンが先だよ!」

私は彼を先に頂上に立たせたかった。サンタ・クルス・ノルテの登山はもちろん、今回の遠征で彼はどれほど大きな役割を果たしてくれたことか、そして自分はどれほど多くのことを彼から学んだか。だから、この山の頂上を先に踏むのは宮下の筈だ。しかし、彼は断固として譲らない。僅かに年長の自分に敬意を表して遠慮しているのだろう。宮下の確保のもと静かにダルマの背中側からその頭に立った。1967年7月24日午後0時20分、正にそこは、一度は逃げ帰ろうかと思った、コルディエラ・ブランカの残された未登峰、サンタ・クルス・ノルテの頂上だった。

「今度はオッチャンの番だぜ!」宮下は、ヤッケのポケットにしまっていた日本とペルーの国旗をピッケルに結んで頂上に立ち、高々と振り上げる。BCからは村井隊長、横地副隊長が900mmの望遠レンズでこの瞬間を待ち構えているはずだ。

やがて広場に戻った宮下と自分は初めて固い握手を交わした。「ご苦労さん。おめでとう!」改

めて交わす言葉はそれだけで十分だった。それから再度交代で頂上に立ち、写真を撮り合った。西郡は持ってきた婚約者の写真の裏に、1961年4月に穂高で遭難した岩本、伊藤両先輩の名を記してそっと埋めた。

サポート隊の合流まで2人はのんびりと頂上で時間を過ごした。太陽はサンサンと、まぎれもないアンデス日和。眼をはるか東に転ずればサンタ・クルス主峰、キタラフはもちろん、早大のアルパマヨ、一橋大のプカヒルカがはっきりと指摘できる、本当にぜいたくなパノラマだ。

サポートも合流し頂上を踏んで一休みしたところで、頂上と別れねばならない。4人は午後1時半、一団となって下降にかかり、アプザイレンの連続で雪洞への戻りが6時半過ぎ、更に西壁への下降は、40mで17ピッチ。C2は夜の9時40分だった。

へとへとに疲れ果てての帰着だが、この時ほど頂上にいたった感激が実感として胸に迫ったことはない。4人は抱きあって、生還を喜び、C1に届けとばかり声を張り上げた。“登ったぞー! 帰ったぞー!”

感激の涙が、頬をぬらし、声がかすれて声にならずとも、それで良いのだった。



● 永河湖越しに見るサンタ・クルス・ノルテ峰